

新渡戸稲造の神秘思想

アントニウス・ブジョ

はじめに

新渡戸稲造(一八六二～一九三三年)は、若き頃から神秘的な側面があり、他の近代日本のキリスト教思想家——たとえば内村鑑三(一八六一～一九三〇年)や植村正久(一八五八～一九二五年)など——と同列に論じられることはほとんどないと鶴沼裕子がすでに指摘した¹。また、伝道的な活動や聖書の注解などを一切行わなかったことから本当にクリスチャンであったのかさえも疑われている²。

新渡戸における信仰の展開を、札幌農学校の同期である内村鑑三や宮部金吾との思想的比較を通し詳細に検討した宮本信之助は、晩年の新渡戸における「神秘心理性」に触れ、ベルクソンの影響と山形赤湯長岡東雲寺の佐藤法亮師との交流の存在を指摘している³。また松隈俊子『新渡戸稲造』(一九六九年)は、新渡戸の日記から、札幌農学校在学中の彼が、「父ノ光ヲ見」というような神秘体験を受けていたことを明らかにしている。

こうした「神秘性」を有した新渡戸が、内村鑑三のような他の近代日本のキリスト教思想家たちとの比較思想的研究の対象となることは、皆無であると言って良い。それは、内村における合理的なキリスト教の理解や明治時代のひとつの特徴としての科学的な社会と比較して理解したからではないかと考えられる。しかしそもそも宗教や信仰というものは、合理的あるいは科学的なものなのであろうか。また、たとえ神秘主義という「異質性」を有しているにせよ、当時の社会において、新渡戸がキリスト者として果たした役割と貢献を否定できるのだろうか。本論文は、近代日本において東洋と西洋の文化と思想の懸け橋として尽力した新渡戸の神秘主義の存在を、そのキリスト教信仰とりわけクエーカー派との関わりを中心に明らかにすることを通して、彼の思想の構造全体を概観することを目的とする。またこの試みは、近代日本キリスト教史の叙述においてしばしば閑却されてきた神秘主義の意義を再検討するものともなろう。

一 キリスト教——苦難と灯火

新渡戸が、実際に初めてキリスト教に触れたのは、一八七三年に入学した東京英語学校において、教科書として使用されていたキリスト教系の書物を通してであった。在学中に彼は、*The Importance of Introducing Christianity into Japan* (日本に対するキリスト教伝道の重要性)と題する小文を草し、これは英作文教師であった米国人のマリオン・M・スコット⁴に選ばれ、一八七六年にフィラデルフィアで開催される百年記念の博覧会に出展された。幼い新渡戸がこのような題目を選んだ理由について、彼自身は具体的に書き残して

はないが、おそらく進化論を支持しているスコットに対する反発的な感情の表現として書き上げたのであろう⁵。このことについて、晩年の彼は、次のように回想している。

あの特別な主題を私が選んだ、もっと必然的な理由は、英語の読書から知らず知らずに受けた影響である。教科書はおおむね英語であったが、私にとっては善くも悪くも、唯一の知恵の木であった。前述のように感情的な性質であったから、宗教的思想で一ぱいな書物に述べられている物語は、私の柔軟な心に強い印象を与えた。私は憐れみ深い心に飢えていた。私の心をたびたび無限の孤独感がおそい、心の中にも外にも非常な空虚感があった。そして救いの望みを少しでも与えてくれるものには、すぐに藁をも掴む気持ちになった。福音書の物語が私の心の中に呼びさました不思議な神秘的な意識が、まだ一度も教会の中に入ったことも、宣教師と話をしたこともなかったにもかかわらず、祖国の人々を有能にし、世界の国々の中の偉大な力となるようにするには、キリスト教の導入が不可欠であるという、うぶな意見を書かせた主な原因ではなからうか。⁶

新渡戸少年は、自らが受けた英語教育を「唯一の知恵の木」として摂取した。そして、そこで専ら用いられていたテキストに記されたキリスト教の教説に親しむうちに、キリスト教こそがこの「知恵の木」(=西洋文明)の本質であると理解した彼は、それゆえ「追いつき追い越せ」を標榜し近代化を目標とする日本には、「キリスト教の導入が不可欠」であると考えたのである。英語の読書を通じ、キリスト教の神秘的な息吹に心をひかれ、思春期特有の情緒不安定がどこか安らぎを覚えたため、次第に聖書の福音書に親しむようになっていったのである⁷。

東京での生活も六年を過ぎた一八七七年、前年に開校したばかりの札幌農学校の第二期生を募集する説明会が東京外国語学校で開催された。その際、日本には政治家より物理化学専門家が必要であるという訴えに共感した新渡戸は、青雲の志を捨て、農政学へと進路を大きく転換させることとなる。とは言え、彼にとってこの転身は、まったくの方向転換であったわけではない。すなわち、彼の祖父・傳と父・十次郎とは、三本木の開拓に献身した人物であり、彼らは一八七六年の明治天皇東北・北海道巡行の際に、その功績を顕彰され、その子孫たちも「開拓使」という職を務めるようにとのことばをかけられている。謂わば新渡戸家は、開拓者としての使命を有した家柄であった。かくて一八七七年、新渡戸稲造少年は、国家の未来と家名を背負い、東京を後に希望の土地、北海道へ向かった。

初期の札幌農学校における教育では、ウィリアム・クラーク(*William Clark*、一八二六～一八八六年)の提案により、キリスト教道徳が重視された。クラークは、自ら購入した聖書を生徒たち全員に与え、日曜学校を開いて、生徒たちの宗教指導を行っており、一八七七年三月には、「イエスを信ずる者の契約」を書き上げ、生徒たちに自発的な署名を求めた。第一期生一七名の生徒たちは全員それに署名し、キリスト教入信を決意した。こうした宣教師でもない平信徒の科学者であるクラークの活動によって、当時いわゆる邪宗門の禁が解かれて間もないキリスト教は、札幌農学校に伝えられ、かくして札幌は、日本キリスト

教三大発祥地（横浜・熊本・札幌）の一つとなったのである⁸。

新渡戸自身が、この「契約書」への署名についてどのように考えていたのかは、同年一〇月二七日付けの叔父であり養父である太田時梅宛の書簡から知ることができる。

宗教は、米国人の申し候通り、亦た日本国の諺に「鯛の頭も信心から」と申し候如く、一人一己の意に有り候の物にて、甲は仏を信ずると雖も、乙は敢て同宗を信ずるに為ざる物と存じ候間、私事、元来耶蘇教を貴びたる故、当時は全く彼の宗に相ひ成り候間、小事には御座候得共、一寸御報知仕り候。⁹

ここで新渡戸は、宗教というものは、人間の一人一人の信念から生まれたものであって、信仰の対象は、それこそ「鯛の頭」でも良いと言う。そえゆえ「元来耶蘇教を貴びたる」自分は、「キリスト教」を信仰するのであり、キリスト教を警告していた叔父の懸念には当らないと彼は主張する。これには、叔父・太田も大人の階段を上り始めた新渡戸には何も言うことなく、人生の決断は新渡戸自身に任せようと思ったことであろう。

このように札幌農学校におけるキリスト教の共同体の中で熱心に生活していた新渡戸は、さらにもう一步進んだ。すなわち翌年の六月二日、札幌創成川東岸の外国教師間の一屋において、彼を含めた七名の第二期生と共に、メソジスト派宣教師・ハリス（Harris、一八四六～一九二一年）から洗礼を受けたのである。こののち彼らはクリスチャン・ネームを選び、新渡戸はパウロ、内村鑑三はヨナタン、宮部金吾はフランシスを名乗った。この七名に、すでに受洗した佐久間信恭を加えた八名が小さなキリスト者のグループをつくり、毎日曜午前に特別集会を開き、第一期生と共に聖書の研究会を開き、お互いの信仰を励まし合った。当時の札幌には、牧師は居住しておらず、宣教師のハリスは、開港地である函館から、年に一度ほど札幌農学校を訪ねる程度であったため、生徒たちは自分自身で、聖書及びキリスト教に関する本を読み、順番に説教を行った。このような状況にあったからこそ、札幌のキリスト者グループ（札幌バンド）は、どこのキリスト教派からも影響を受けないまま、独自の性格を形成してくこととなったのである¹⁰。

このような信仰生活の中で、彼にとって最も重要な出来事は「神の存在」への疑惑を抱いたことである。宣教師不在で彼ができることは、絶えず祈りを捧げることであった。「神の存在」に悩んだ彼は、一八七九年のある秋の日、図書館の新聞閲覧所で、一冊の米国の古い週刊誌 *The Independent* に引かれた文章に強い衝撃を受けた。それは、Thomas Carlyle の *Sartor Resartus* (『衣服哲学』一八三六年) であった。正確な文章はわからないが、おそらく神に関する問題ではないかと考えられる。本書の中では、「神の存在と靈魂の不滅であるが、二十年考へても、二千年考へても、解することのできぬ。この事は唯信すべきもの」、「宇宙の果てまで行かなくてもよい、神 (God) はここにいる」など「神の存在」について様々なことが書かれている¹¹。この言葉に触れた新渡戸は、おそらく自分と同じような気持ちを持つ人はこの世の中にも存在すると感じた。神の存在の有無はいくら時間をかけて理解しようと思っても不可能である。ただ信じるだけでよいと改めて確信した。これはまさに、イエスは、自分の復活を信じないトマスに言った言葉と一致している¹²。この言葉

によって、新渡戸の曇っていた心は一瞬で晴れて渡った。さらに新渡戸は、カーライルの言葉に接したいと思ったが、残念ながら当時学校の図書館には一冊もなかった。

こうして、カーライルの言葉に魅せられた新渡戸稲造は、目の病気の治療を兼ねて、一八八〇年七月、夏休みに休暇を得て帰郷する。それは十年ぶりの母との再会になるはずであったが、その直前に母が他界してしまい叶うことはなかった。母の最期にさえ立ち会えなかったことは、彼を失意のうちに落とすこととなる。そののち東京へ向かった新渡戸は、カーライルの『衣服哲学』を求めて東京や横浜の書店を巡ったが、書名すら知られていないという状況であった。そうした中、たまたま彼の授洗者であるハリスが一時帰国するため、その蔵書を処分しているという話を聞き、新渡戸がその居宅を訪ねたところ、幸いなことに、その蔵書のなかに *Sartor Resartus* があった。彼はこれを携えて札幌農学校へと戻っていった。新渡戸にとって『衣服哲学』は恩人のようであり、「若しカーライルが無かったら、今頃何処に往つて居るかしれない」¹³と述べ、晩年まで三〇回以上繰り返し熱読した。

佐藤全弘は『新渡戸稲造の信仰と理想』（一九八五年）において、新渡戸のカーライル思想の感化について次のようにまとめている¹⁴。すなわち、（一）世の中は真面目なものであること、（二）勇ましく、強く、柔和であること、（三）理想と現実が相含み合い実行となって現れること、（四）品格（キャラクター）の重視である。このように言うまでもなく新渡戸にとってカーライルは恩師でもあり、自身の思想の成立過程に欠かせない一大要因でもあろう。

二 神秘主義と「宇宙意識」

札幌農学校の第一期生として入学した大島正健（一八五九～一九三八年）は、新渡戸について次のように述べたことがある。「新渡戸君は世に勝ったのは、第一には、彼の信仰の力にあります。第二には、彼の奉ずる所の人類愛であります。人に騙されても何でも愛するといふ其の愛であります。」¹⁵ ここで注目したいのは、大島が強調した新渡戸の「信仰の力」についてである。大島は、聖書の勉強に熱心な新渡戸稲造が、図書館で様々な書物を読みすぎて、自身の信仰への疑いが発生し、次第に教会から遠く離れてしまったと残念に思っていた。しかし、新渡戸が懐疑感を抱いていたとしても、彼の札幌農学校在学中からの信仰は変わらないと大島は指摘している。それは、新渡戸の日記に記載されているからである¹⁶。新渡戸は、自分は神様が理解できなくなっただけでも、宇宙には何か偉いものがある。それは *Great Law* であり、新渡戸の様々な思考の基盤はすべて宇宙の神というものを信じている点にある。

上述したが、新渡戸はカーライル『衣服哲学』と出会うことによって、「神の存在と靈魂の不滅」は「唯信すべきもの」とであると確信するに至ったのである。彼は、世の中に自分と同じような気持ちを持っている人がいることを実感し、「これまでの煩悶憂鬱が、たちまち雲消霧散して、丸で復活したやうな気持」となったと述べている。そこで、彼なりの「神」の解釈ができたのである。それは、その *Great Law* 及び「宇宙の神」に辿り着いたからで

はないかと考えられる。彼の「宇宙意識」について、札幌農学校時代からカーライル思想の感化が大きいことは否定できない。このような考え方は、米国詩人エマソンの *The Over Soul*（「大霊」一八四一年）にも類似している¹⁷。カーライルとエマソンの書は一九世紀にイギリスとアメリカでよく読まれ、また実際に両者の交流があったことも周知のようである。

新渡戸が、いつ頃エマソンの書を読んだのか不明だが、おそらくカーライル『衣服哲学』の後、つまり札幌農学校を卒業し、アメリカ留学時代ではないかと考えられる。エマソンの *The Over Soul* という思想は、そもそもプラトン哲学や、魂の流出 (*Emanation*) 説を根本的教義とする新プラトン主義の「世界霊」(*World Soul*) 又は「普遍霊」(*Universal Soul*) からの造語であると考えられる。新渡戸の「宇宙意識」は、カーライルの他にエマソンによる宇宙の大霊という思想の感化を受けたと考えられる。彼は、一神教のような神の存在を別にして、この宇宙では、宇宙には何か偉いものがあると信じている。エマソンは、牧師の職を捨てて、自ら東洋の神秘主義を身につけ、宇宙の大霊を信じ、超自然主義者となった。

このような信念によって、キリスト教に限らず、宇宙の中に超越的な存在を信じているどのような宗教でも、新渡戸にとって普遍的なことである。彼の生涯のなかでこのような信念にたどり着くまで様々な道りがあったに違いない。その過程の中には、彼の神秘主義および神秘的な性質があったと考えられる。新渡戸の神秘主義は、神における理解の過程で発生した様々な現象の一部であったと考えられる。自らの神秘性について、新渡戸は「我輩は幼い時から迷信的に一種の霊力を信じてみた為に、学生時代には、折々友人の物笑となった。併し決して妄りに降巫やいた子その他八卦、卜占の如きものを、そのまゝ受け入れる程の迷信者でもない」¹⁸と述べている。

また新渡戸は、米国留学中にキリスト教の真理を求める際、クエーカー派に入信した。神秘的教義である「内なる光」をクエーカー派が重んじていたからであると考えられる。また他の理由としては、佐藤全弘がすでに指摘したように、カーライルがクエーカー派の設立者ジョージ・フォックスを尊敬していたからであろう。新渡戸がこの二人、つまりカーライルとフォックスも、神秘家であると認めたことが明らかになった¹⁹。そもそも、新渡戸は宗教と神秘主義について、どのような見解を持っていたのかが以下の引用文から確認できる。

人が、現世の生を越えた自らの存在に関して信じることは、それが未来においてであれ、また過去においてであれ、私には、その人の信仰を形づくるものであるように思われる。そして、人の信仰の帰結として彼がなすこと——特に信教活動において——は、その人の宗教を構成する。(中略) 宗教的な信仰の本質の中には、神秘と神秘主義が含まれていないだろうか。²⁰

このように、新渡戸は、宗教と神秘主義に関して決して無関係ではないと言い、むしろ、宗教というものは、「人が、現世の生を越えた自らの存在に関して信じること」であり、宗

教的な信仰の本質は神秘主義から切り離すことができないと訴えている。

また、一九二六年にジュネーブ大学で演説した「日本人のクエーカー観」の中で、新渡戸は、なぜ日本人である自分がクエーカーに魅せられたのかについて語っており、そこで彼は、クエーカー派の教義の出発点である「内なる光」が、「東洋の精神」と通底するものがあることを指摘している。この「東洋の精神」とはおそらくイスラム教のスーフィズムとイランのバハーイ教にみられる神秘主義のことを指していると考えられる。新渡戸は、「内なる光」による「光」を「この世に生まれてくるすべての者を照らす光」であると解釈する一方で、それが仏教の「涅槃」や禅・道教といった東洋思想と符合する点が多いことを指摘し、「クエーカー主義において、初めて、キリスト教と東洋思想を調和させることができた」と結論する。国際舞台で長期に渡り活躍してきた成果でもあろうが、西洋と東洋の共通する思想を見出すことができたことは彼の思想の重要な点と考えられる。

さらに、新渡戸はベルクソンの「知性と値観」や、カナダの心理学者バックの「意識発達」を挙げて、人間の最も高い段階の意識へ到達することによって偉大な宇宙に融合ができると述べている。つまり、新渡戸は、小宇宙が大宇宙と一体化する意識の状態であり、この宇宙を通して生き、働いている偉大な神霊と人間が一つになることを、直ちに感得できる段階であると説いている。彼は、この全体の生命と個人の生命との同一性は、東洋哲学の特色と指摘している。しかし、このような指摘は他のキリスト教者たちから非難が全くないというわけではない。たとえば、インスピレーションという人間の靈感による着想について、内村鑑三はその靈感の真偽は一般の人たちには簡単に区別できないだろうと非難している。内村にとって、キリスト教者であれば、聖書そのものに神の聖霊が宿っているので、聖書の言葉に従うだけで救われると言っている。内村鑑三のような人たちの見解に対して新渡戸稲造は以下のように述べている。

宇宙意識は、精神の照明である。つまり、それは、新しい精神的な力の獲得である。言い換えれば、心の純化であり、地上の人間から、より高い領域の存在へと高まることである。それは霊による洗礼である。これらの変化を起こす力は、キリストに基づくこととされてきた。しかしながら、もし、キリスト教徒の中に、この力を体得した、「異教徒」と同類にされるのを拒絶するひとがいたり、あるいは、非キリスト教徒の中に、この特別な洞察力をもつキリスト者を喜んで友人と認めたがらない人がいるとしたら、それは彼らが、いずれも、未だ真理に達していないしるしである。(中略) 私は再び問う、それでは、いわゆる啓示宗教——これは私の考えでは、イエス・キリストの人格と生命における神性の啓示を意味するが——には、何の優位もないのか？と。私は、キリスト教は、次の点で有利である——これを優位とは呼ばないが——と思う。つまり、それは弱い普通の人間に、その心を集中すべき明確で具体的な目標を与え、そして、“全き人間”の発見に資するからである。全き人を知ることによって、われわれは、彼と一緒にいる。——これが、一つになること、すなわち贖罪である。彼に従うことは、人生の低き次元から救われることである。彼を沈思熟考することは、神自身

を見て救済されることなのである。²¹

ここで注目したいのは、新渡戸が自身の見解を正当な教義と見なしている点である。彼は、このような信仰に対して拒否しているキリスト教者および非キリスト教者がいることを意識している。しかし、彼は「宇宙意識」によってキリスト教者は、「新しい精神的な力を獲得」できること、また、それを「贖罪」として見なし、神が救済してくださるという形を説いている。新渡戸は、このような「啓示宗教」を非難している人たちに対して、彼らを「未だ真理に達していない」と反発している。新渡戸は、このような神秘主義は他宗教にも存在しているが、「彼（イエス）を沈思熟考することは、神自身を見て救済される」と述べ、これを他宗教に比べて、キリスト教の優位と指摘している。

新渡戸は、西洋におけるキリスト教者たちに対し、キリスト教の優位表現を度々見せるが、日本国内の舞台においては、キリスト教の優位強調を避け、日本伝統的な信仰（仏教、神道など）と同様に見なしている。たとえば、以下の引用文である。

併し僕は、必ずしも神と限るのではない。仏教の世尊でも、阿弥陀でもよい、神道の八百万の神でも差問ない。僕は何の宗教といふことを、爰で彼れ是れいふことを好まぬ。只人間以上のあるものがある。そのあるものと関係を結ぶことを考へれば、それで可いのである。²²

以上の文章は『修養』（一九一一年）に収録され、新渡戸は東京第一高等学校の生徒たちのために語っている精神教育および修養についてである。以上からわかるように、日本全国から来た生徒たちのために日本文化および伝統の誇りを持たせるために、彼は特定の宗教にこだわらず、生徒たちに人生の選択として任せている。

そもそもキリスト者はなぜ神秘的な体験をしたのかについて、米国の宗教心理学者 *James H Leuba* は、神秘的な体験の動機を五つに分類できるという。①自己肯定の傾向と自尊心の必要性、②何かまたは誰かの為に大切にする又は、自分を捧げる傾向、③愛情と精神的な支援の必要性、④平和の為に一意専心及び一致の為に受動性と行動の必要性、⑤感覚的な満足度の必要性（特に性生活との関わり）である²³。新渡戸稲造の神秘主義はどのような動機を持つのかについてこれから検討したい。

幼いころから神秘性の傾向があると認められた新渡戸稲造を、実際に実証できるような文書が見られるのは、彼が青年になってからである。迷信的なもの以外にどのような神秘的な体験をしたのか以下の通りまとめた。

①札幌農学校在学中による神秘的な体験日記には、明治十二年（一八七九年）八月三十一日「怒ル事ナク聖書ヲ接スルヲ樂トナス父ノ光を見タル事」²⁴と記されている。札幌農学校に入学して二年目になった新渡戸稲造は、生活に慣れた一方、キリスト教への信仰が揺らいだ時期があった。それに気付いた彼は、深く反省し、悲しみながら神の許しを求めている。その悔い改める反省の中で彼は「父（なる神）の光」を見たという神秘的な体験をしたという。

②札幌で開拓使の技術者任務中、米国留学中の宮部金吾宛の書簡、一八八二年二月三〇日

日付、「僕は人間の解くべき最も重大な問題を解くことができた—すなわち、神の存在」だ！！（中略）僕は自分自身の内にまた外に、ひとつの"神"を感じたのだ。僕は僕の内に小さなかすかな声を聞き、その声に威厳にみちた、壮重な「声」が外から応えたと感じた。その声は「言葉」なのかもしれないが、僕には声だけが聞こえて「言葉」の発音ははっきり聞き取れなかった。僕はもしその「言葉」が神の声なら、その「言葉」を聞かせてくださるようお願い、神にたえず祈っている。」²⁵ここで、神の存在に頭を悩ませていた新渡戸稲造は、祈りと聖書に親しむ中で、再び神の声を聴くことになったという神秘的な体験をした。

- ③米国留学中、ボストンのある靈的作用の集会に出席する際、自分の座する後ろに他界にいるはずのお祖父さんが重要な伝言を伝えにきたと仲介者(*Medium*)と称する巫子が忠告したという²⁶。
- ④米国のロンドンを訪れた際、ある靈的作用の集会に出席し、再び学術的に解明できない神秘的な幻想を目にしたという²⁷。
- ⑤晩年になってから特に一九三〇年から一九三三年の間に、大阪毎日新聞 Editorial *Jottings*において、「オキナ」という抽象的な老人が度々文章の中に出ている。この「オキナ」はおそらく自分自身の内面的な存在と考えられる。
- ⑥メリー婦人によると新渡戸はかなり神秘主義者であったという。婦人は、「ノートの余白に、新渡戸は指導者として、キリスト、ジャンヌ・ダーク、仏陀、モハメッドをあげています。新渡戸は英雄崇拜家であり、自身相当の神秘家でした。彼にはジャンヌの「声」の呼びかけと、その「声」に対するジャンヌの信仰が判りました」²⁸と述べている。
- ⑦新渡戸稲造の弟子である上代たのによると、新渡戸は神秘的な世界、幽霊話、幻の世界について、強い興味を持っていたという²⁹。等

以上のように、新渡戸稲造の神秘主義については、自らの言葉及び周りの人々の言葉で明確になった。新渡戸が体験した神秘的なこととは、彼自身が学理的に解明できないということは事実である。しかし、動機としては、*Leuba* の区分から考えると、⑤感覚的な満足度の必要性（特に性生活との関わり）の以外に、以上の神秘的体験は①から④までの区分に当てはまることがわかった。すなわち、神秘主義者としてその心理的な面から確認できた。また、特に新渡戸の①と②の光、声、言葉を通じて「神との出会い」という神秘的な体験は、心理学的には説明できる。それは、人間の強い信仰によってその懂れているものに対して現象として出会うことが可能という説である。すなわち、彼は、当時、キリスト教への信仰が揺らぐという犯した罪に対して、深く反省する中に、神の許しを強く求めているとき、神の許しの証としての「光」、「声」、「言葉」を見たり聞いたりすることができたという。

以上からわかるように、新渡戸は、札幌農学校在学中時代から晩年になるまで、キリスト教の神に限らず、この宇宙には「何か偉いもの」という *Great Law* があると信じている。このような精神的信念から生まれたのは、他でもなく「神秘主義」というものに違いない。

これは彼にとって信仰および宗教の本質になるものであり、その信仰を新渡戸は生涯持ち続けていたことが確認できた。次に、実際に近代日本キリスト教社会において、神秘主義はどのように見なされているのかこれから検討したい。

このような「宗教」という枠を超えた新渡戸の宗教観は、鶴見俊輔をはじめ、岩崎孝志などによれば「折衷主義者」と見なされるものである。いわば「シンクレティズム」を支持する者であって、江戸時代の儒学者たちの間よく見られる傾向である。新渡戸もその影響を受けたと岩崎は指摘している³⁰。しかし、例えばそういう傾向があるとしても新渡戸の場合は、「公」という場において、自分が抱いたキリスト教の信仰をあまり強調したがない姿勢、つまり「謙遜」であると考えられる。特に近代日本において、国家発展のために様々な思想(外来と国内の思想を含め)を取り入れ、国づくりという大事業において一つ思想だけに主張することはタブーであると考えていたのであろう。そこで、新渡戸は様々な思想を超えて、その共通点だけに主張する立場を選んだのであろう。

三 近代日本キリスト教における位置

本論文冒頭にも触れたが、新渡戸を近代日本のキリスト教思想家たちに並べることはできないと鶴沼裕子は指摘している。それには二つの大きな理由があり、一つ目は、内村鑑三や植村正久などと異なり、新渡戸の主たる活動がキリスト教の伝道ではなかったからであり、そして二つ目は、彼に一種の神秘主義的な異質性が存在しているからだと言う。つまり、「伝道」の欠如と「神秘主義」の存在が、新渡戸を近代日本キリスト教における思想家として「列聖」することを妨げているということになる。

確かに新渡戸は牧師でもなく伝道者でもない。しかし、彼は一人のキリスト者として、世界中に様々な機会を持って、キリスト教の教えの種を蒔いた人物であった。それは、伝道的活動とはいえないであろうか。実際に彼はどのようにそのキリスト教の種を蒔いたのかについて、事例としてまとめたい。たとえば、『武士道』(一九〇〇年)の中で、新渡戸は「功利主義及び唯物主義に拮抗するに足る力なる倫理体系は基督教あるのみであり、之に比すれば武士道は『煙れる罌麻』の如くであることを告白せざるを得ない。」³¹と、日本の倫理体系にはキリスト教が不可欠と主張している。また、『西洋の思想と事情』(一九三四年)には、共存共栄的な生活をしている日本国民は、西洋のキリスト教のような「パーソナル・レリジョン」の精神から生まれた「独立心」を学ぶ必要があると述べている³²。さらに、「日本人のクエーカー観」の中で彼は、東洋の生命観とクエーカー派の「内なる光」の類似を多く述べている。このように、新渡戸稲造もキリスト者として、様々な形式と場所でキリスト教の教えを世界中に広めていたことが確認できた。

また、キリスト教と神秘主義について必ずしも無関係という訳ではない。そもそも、キリスト教において神秘主義は存在するのかについて、心理学者でプラグマティストとして知られるウィリアム・ジェームズ(William James、一八四二～一九一〇年)は、「キリス

ト教会には、いつの世にも神秘主義者がいた。その多くは猜疑の目で見られたが、中には権威ある人々のからの支持を得た者もある。この人々の経験は先例として扱われ、それを土台としてその上に神秘神学の体系が集成されていて、神性な経験はすべてその体系内にそれぞれの位置を与えられている」³³といつの時代にも、神秘主義が存在すると指摘している。しかしこのような意見に反対した学者もいる。たとえば、英国の思想家ステース (*W. T. Stace*、一八八六～一九六七年) は、「プロテスタントに神秘家はいない」³⁴と主張している。神秘思想が果たしてキリスト教に不可欠なものであるのか否かについて、いまだに結論はまだ出ていない。しかし、なぜキリスト教において神秘思想および神秘主義が存在するのかについて、ひとつの理由としては「神との直接的接触を探求し、これを体験すること」と特徴付けることができよう³⁵。つまり神秘主義者は、神について知るだけでは満足しない。彼らは様々な意味で「神との合一」を渴望するのである。

明治維新以来、米国と英国のキリスト教の伝道師たちの伝道によって、近代日本のキリスト教は大きく発展したが、一九〇〇年以降は、日本の独自のキリスト教運動が展開していった。そうした中で、日本プロテスタント史において最も注目されるのは、内村鑑三の「無教会」運動である。内村鑑三は新渡戸稲造と親密な関係があり、両者とも札幌農学校における独特なキリスト教の経験を得て、活動した人物である。また、同時に神秘的な体験を重視し、「神との合一」というキリスト教の知識人宗教家もいた。たとえば、綱島梁川（一八七三～一九〇七）である。彼が一九〇七年に書いた『見神実験』という宗教の神秘的な体験を基にした著作は、当時の若い世代の人々に大きな影響を与えていた。

綱島梁川（本名は栄一郎）は、一八七三年に岡山県に生まれ、一七歳の時、故郷の高梁教会（組合派）で洗礼を受けた。しかし、彼の回想によれば、この時の素朴な信仰は上京して、東京高等専門学校（現在早稲田大学）で学ぶうちに半ば崩壊し、教会からも遠ざかっていったと述べている。彼にとって、キリスト教の教えは、ただ倫理性のみに収斂していった³⁶。西洋の思想を学ぶ一方で、彼は漢学と文芸にも興味を持った。また、倫理学に深い関心を持っている彼は、特に「自己実現」に関して、英国の倫理学者のトーマス・ヒル・グリーン (*Thomas Hill Green*、一八三六～一八八二)、ヘンリー・シジウィック (*Henry Sidgwick*、一八三八～一九〇〇) から影響を受けたと見られる。綱島は、仕事と研究の多忙の中、二三歳の時、突然咯血し、その後療養しながら研究を続けた。一九〇四年、彼は三一歳の時に、夏から秋にかけて三度にわたり、神秘的な出来事を体験し、後に「見神実験」という題をつけて記している。この宗教的な体験に対して、綱島自身は「見神の一義は、唯だ見神そのものにして終はらず、枯れず、更に豊富なる客観的新生命を開発し来たりて、我等が無窮向上の縁となる。少なくとも、見神は人をして真個の宗教生活に踏み入らしむる確実なる一関門なり」³⁷と述べている。このように、彼は見神という神秘的な体験は、唯の体験だけでなく、その宗教的及び精神的な意味を人間の心に対して豊富にしたという志が見えてくる。それ以降彼は、宗教的人生論を鮮烈に説いて江湖の注目を集め、一つの神秘主義的宗教思想を開花させるに到る³⁸。

新渡戸稲造は、網島梁川のように一七歳で洗礼を受けた。一時的にキリスト教に対して熱心であったが、その後、キリスト教の信仰を抱いたまま教会から離れた。最終的に、新渡戸は、神秘主義という内面的な傾向を通じて、クエーカー派と出会ったが、網島の「見神実験」ほど、世間に強影響力を持っていなかった。しかし両者の共通点は、神秘主義を通じて、自分の信仰であるキリスト教を改め、その魅力を発見できた点であろう。また、両者とも、神秘主義を通じて、個人の存在と宇宙全体の存在の関わりを意識できたことがわかった。また、日本人がすでに親しんできた仏教の座禅を評価し、瞑想という方法で悟り及び「神との合一」を到達することは両者のキリスト教的な神秘主義と類似している。しかし、両者の異なる部分は、少なくとも一点ある。それは、神秘体験を異なる活躍舞台で活用することである。すなわち、網島においては宗教思想を通じて神秘体験を公開することである。他方、新渡戸稲造においては、その神秘体験を自分自身のためだけではなく、修養的という新たな形をとって周りの人たちにも伝えられるのである。

さらに、近代日本キリスト教において、日本の伝統と修養の重要性を強く訴えながら、神秘的な領域まで指導している日本人のキリスト教者たちも何人かいた。たとえば基督心宗教団を設立した川合信水（一八六七～一九六二年）である。彼が儒教と仏教という眼鏡を通して信仰を再解釈したこの日本的な教会は、キリスト教がさらに完成度の高い自己修養の途を提供していることを訴え、キリスト教的な悟りに至るために仏教の伝統的瞑想修行を唱道している³⁹。この悟りは「神との合一」という言葉で理解できる。また、川合によれば、プロテスタントの教派の大半は、宗教改革者のマルティン・ルターの解釈に盲従し、「ヤコブの手紙」とそこで教えられている信仰の実践や「はたらき」について理解も評価もしていない。使徒パウロが説いた「恩寵」の福音を、この新約の書簡が不明瞭なものにしたとルターは考え、それゆえそれを「取るに値しない書簡」だと見なしていた。しかし、そうすることによって、ルターが会得できたものは、新約聖書の半分にとどまった⁴⁰。また、川合の十六世紀におけるフランシスコ・ザビエルの禁欲的な指導への感動に対して、マーク・マリズ（Mark R Mullins）は、川合がローマ・カトリックの伝統に関する聖人や神秘家の生涯における禁欲的修業の価値を認める限りではないかと指摘している⁴¹。新渡戸と川合の活躍舞台は異なるが、両者とも神秘主義者であり、信仰をただの言葉だけでなく、実践することを重視にしていることがわかった。

なお、新渡戸稲造の神秘的な信仰において、彼が東京第一高等学校の校長を務めた時の弟子・矢内原忠雄（一八九三～一九六一年）も指摘している。矢内原は、内村鑑三と新渡戸稲造に対して「内村鑑三と新渡戸稲造とは私の二人の恩師で、内村先生より神を、新渡戸先生よりは人を学びました」⁴²と述べながら両者を大変尊敬している。この新渡戸稲造から「人を学びました」という言葉を詳しく検討してみると、矢内原が新渡戸から学んだことは、次のようである。まず、教育の精神、つまり、「強制的な命令的な態度を避け、生徒の自発的覚醒を促す態度をとる」という新渡戸の人間的教育の特色を学んだのである。そして、誰に対してもお互いにお辞儀しなさいという指導は、新渡戸におけるキリスト教の

教義「隣人愛」の主張である。さらに、信仰の核に触れる新渡戸の「神秘的実行主義」について、矢内原は、新渡戸稲造における神秘的とは、キリスト教クエーカー派を受け継ぐもので、神との霊的交通であると指摘する。そして、その方法として新渡戸は「悲しみ」という感情的な状況を通じ、神と霊的に交わっているという。「神が我が心を知り、我を支持してくれるから」と新渡戸が述べたことに関して、矢内原はこれが新渡戸の「人生観の根本」であると述べた。

このように、近代日本キリスト教においてキリスト教の神秘家たちは、様々な舞台で活躍したことが確認できた。しかしながら、神秘主義の性格は、新渡戸稲造、網島梁川、川合信水など、それぞれ異なっている。しかし、彼らの共通点としては、少なくとも一点、明確にできた。それは、その「神秘性」をより実践的に行い、そしてそれを近代日本国民の精神的なところに注入している点だと考えられる。その成果として、新渡戸稲造の場合、教育という面で非常に評価されているということが明確になった。また、彼らのほとんどは、西洋の思想の核ともいえるキリスト教に対して、自国の東洋伝統文化及び思想に適合するために、「神秘的」という一つの方法を通して実践してみた。彼らもキリスト教者でありながら、日本人である。特に、日清戦争と日露戦争の終戦の時期に、近代化の精神が揺らぐようになってくるとともに、彼らは国民の精神的な空間に入り込もうとしたのである。西洋の水準にまで日本文明が到達した一方、彼らは東洋の文明の魅力を再び磨こうとしていた。

以上の考察から、キリスト教の神秘思想家こそ近代日本において重要な役割を果たしたことが明確になったのである。

おわりに

幼いころから母の教育によって寛容的な性質を抱いていた新渡戸稲造は、上京してから、英語学を通じて、始めてキリスト教と出会った。東京英語学校在学中、彼はさまざまな機会を持ってキリスト教に触れた一方、進化論を支持している無神論者であるスコットと関わりを持った。それでも、彼は西洋文明の精神ともいえるキリスト教に強い影響を受け、札幌農学校に入学してからキリスト教に入信を決心した。これは、彼にとって喜びでもあり苦難の第一歩にもなったのである。新渡戸は決してキリスト教における神の存在を疑う心を抱いていたわけではなかったが、「神」をどのように理解すればいいのかについて困難に陥ったのである。この苦難の中で、光を照らしてくれたのはカーライルの文書「神の存在と靈魂の不滅であるが、この事は唯信すべきものにして、二十年考へても、二千年考へても、解することのできぬものである。」である。このカーライルの言葉によって、新渡戸は、イエスが、自分の復活を信じないトーマスに言った言葉と一致していることに気付いたようである。その後、次々と苦難に陥った彼は、トーマス・カーライル『衣服哲学』と神の許しを頼りながら人生を歩んでいく。札幌農学校在学中に新渡戸稲造の生涯において

最も重要な点はいくつかある。それは、(1) キリスト教に入信すること、(2) 母を亡くしたことと『衣服哲学』との出会い、(3) 神秘的体験を初めて体験したことである。

新渡戸稲造の神秘主義の要因としては二つ可能性があると考えられる。それは、まず、天然の性質であり、そしてトーマス・カーライル『衣服哲学』とエマソン『大霊』であると考えられる。両者を重ね、彼は米国留学する際、キリスト教クエーカー派に関心を持つようになった。その関心の根本とは、ただ他教会と異なるその純粹さだけではなく、「内なる光」という人間の心の中に神の光が宿っているという教義である。新渡戸は、このような教義は、世界のどのような信仰および宗教にも存在すると主張しながら、特に東洋思想には最も近いと指摘する。彼はこれについて「クエーカー主義において、初めて、キリスト教と東洋思想と調和させることができた」と述べている。また、彼は、バークの「意識発達」とベルクソンの「知性と値観」に基づいて「内なる光」と東洋思想の「宇宙意識」の共通について次のように解いている。人間の最も高い段階の意識へ到達することによって偉大な宇宙に融合ができる。つまり、小宇宙（人間）が大宇宙（神）と一体化する意識の段階であり、この宇宙を通して生き、働いている偉大な神霊と人間が一つになることを、直ちに感得できる階段であると説いている。キリスト教においてこれは優位的である。なぜなら、「彼（イエス・キリスト）を沈思熟考することは、神自身を見て救済される」と新渡戸は主張しているからである。しかし、このような新渡戸稲造の見解は、他宗教を軽視するつもりではなく、むしろキリスト教と同様に他宗教の神秘的な部分において同じような働きがあると認めている。

近代日本キリスト教の社会において、神秘主義はどのような位置を持っているのかについて、新渡戸稲造、綱島梁川、川合信水などの生涯から見てとることができる。たとえば、新渡戸稲造は、キリスト教者でありながらその神秘的な信念を教育と国際舞台において実によく適合させている。教育の面では、特に生徒たちの教育精神および修養的なところに適合している。国際舞台の面においては、調和的、寛容的なその性格で様々な国際問題を乗り越えることができている。綱島梁川の場合は、彼の日本近代社会に初めて公開した神秘体験「見神実験」によって、若者たちの評価を受けている。また、川合信水の場合、日本の伝統信仰仏教の「さとり」を取り上げながら、キリスト教においても、聖書の言葉を重視することだけではなく、実践的つまり「はたらき」を重視することによって人間は神のところまで、つまり「さとり」を到達できると論じている。ウィリアム・ジェイムスが述べているように「キリスト教会には、いつの世にも神秘主義者がいた。」、また新渡戸稲造が「宗教的な信仰の本質の中には、神秘と神秘主義が含まれていないだろうか」と指摘したように、近代日本キリスト教においても神秘主義は欠かせないものであると考えられる。特に、大正時代に入ってから国民の精神的な教育および修養においてキリスト教思想家たちの貢献は無視することができないと考えられる。

- 1 鶴沼裕子「新渡戸稲造の宗教観」、『聖学院大学論叢』、八（二）、東京、一九九六年、一三～二六頁
- 2 岩崎孝志「国家と信仰—新渡戸稲造と矢内原忠雄の場合—」渡辺信夫・岩崎孝志・山口陽一『キリスト者の時代精神、その虚と実—キリシタン、新渡戸稲造、矢内原忠雄、柏木義円—』いのちのことば社、東京、二〇〇五年、一〇〇頁
- 3 宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』、東京女子大学新渡戸稲造研究会、東京、一九六九年、五～三三頁
- 4 マリオン・スコットは、明治四年（一八七一年）に、大学南校の英語教師として来日したお雇い外国人である。翌年、師範学校に移ると、やがて明治七年（一八七四年）には東京外国語学校に転任した。新渡戸と同じく、東京英語学校で勉強していた内村もスコットの英語教授法を高く評価し、「スコット氏のメソッドは私等をして英語の勉強に多大の興味を覚えさせるにいたった」と記している。（内村鑑三「スコットメソッドの復活と浦口君のグループメソッド」『内村鑑三全集』、岩波書店、東京、一九八三年、三〇巻五五〇～五五二頁）
- 5 新渡戸稲造『幼き日の思い出』（一九三四）『新渡戸稲造全集第一九巻』、教文館、東京、一九八五年、六四五頁
- 6 同上、六四五～六四六頁
- 7 松隈俊子『新渡戸稲造』、みすず書房、東京、一九六九年、二五頁
- 8 同上、四〇頁
- 9 貝出寿美子（編）「太田（新渡戸）稲造書簡」、東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』、春秋社、東京、一九六九年、三九七頁。
- 10 Charles Inglehart, *A Century of Protestant Christianity in Japan*, Charles Tuttle Co. Vermont and Tokyo, 1959
- 11 新渡戸稲造のカーライル『衣服哲学』の理解は主に『衣服哲学講義』（一九三八年）（『新渡戸稲造全集第九巻』教文館、東京、一九六九年）に収録されている。
- 12 ヨハネによる福音書二十：二九、『新約聖書』「私を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」
- 13 「ゲーテとカーライル」『随想録』（一九〇七年）『新渡戸稲造全集第五巻』教文館、東京、一九七〇年
- 14 佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館、東京、一九八五年、一五四頁
- 15 大島正健「新渡戸稲造君の思ひ出」『新渡戸稲造全集・別巻』教文館、一九八七年、四八～四九頁
- 16 新渡戸稲造の日記及び Great Law について松隈俊子『新渡戸稲造』、みすず書房、東京、一九六九年に収録されている。
- 17 Emerson, *The Over Soul (Selected Writings of Ralph Waldo Emerson)*, Signet Classic, New York, 2003, p.293-311
- 18 新渡戸稲造、『東西相触れて』（一九二八）『新渡戸稲造全集第一巻』教文館、東京、一九九六年、二七一頁
- 19 フォックスの神秘主義について、彼はアンリ・ベルグソンを対話する際触れたことがわかっている。『東西相触れて』、『新渡戸稲造全集第一巻』三三〇・三三一頁
- 20 新渡戸稲造『日本文化講義』（一九三六）、『新渡戸稲造全集第十九巻』、教文館、東京、一九八五年、一七〇～一七一頁
- 21 新渡戸稲造「日本人のクエーカー観」『日本文化講義』（一九三六）『新渡戸稲造全集第十九巻』教文館、東京、一九八五年、四二〇～四二一頁
- 22 新渡戸稲造『修養』（一九一一年）、『新渡戸稲造全集第七巻』東京、一九七〇年、五七～五八頁
- 23 James H Leuba, *The Psychology of Religious Mysticism* (宗教的の神秘主義に於ける心理学研究), Kegan Paul, Trench Trubner & Co., LTD, London, 1925, p.117
- 24 熊隈俊子『新渡戸稲造』、みすず書房、東京、一九六九年
- 25 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第二十三巻』、教文館、東京、一九八五年、七一六頁
- 26 同上『帰雁の蘆』（一九〇七年）『新渡戸稲造全集第六巻』教文館、昭和四四年、八〇～八一頁
- 27 同上『東西相触れて』（一九二八年）『新渡戸稲造全集第一巻』教文館、東京、一九六九年、二七五～二七七頁
- 28 新渡戸稲造婦人「ジャンヌ・ダークと新渡戸稲造」『新渡戸稲造全集・別巻』教文館、東京、一九八七年、四四四頁
- 29 上代たの「新渡戸先生」『新渡戸稲造全集別巻』教文館、東京、一九八七年、三六二～三六三頁
- 30 岩崎「国家と信仰—新渡戸稲造と矢内原忠雄の場合—」渡辺信夫・岩崎孝志・山口陽一『キリスト者の時代精神、その虚と実—キリシタン、新渡戸稲造、矢内原忠雄、柏木義円—』いのちのことば社、東京、二〇〇五年、九一頁
- 31 新渡戸稲造『武士道』（一九〇〇年）『新渡戸稲造全集第一巻』教文館、東京、一九六九年、一三七～一

三八頁

- 32 新渡戸稲造『西洋の思想と事情』（一九三四）『新渡戸稲造全集第六卷』教文館、東京、一九六九年、五七八～六二五頁
- 33 ウイリアム・ジェイムス（著）榊田啓三郎（訳）『宗教的経験の諸相 *The Varieties of Religious Experience*』、岩波書店、東京、一九七〇年、二二三～二二四頁
- 34 Anne Fremantle and W.H. Auden, *The Protestant Mystic*, London, 1964, p. vii
- 35 A・ラウス（著）水落健治（訳）『キリスト教神秘思想の源流 *The Origin of Christian Mystical Tradition*』、教文館、東京、一九八八年、十三頁
- 36 網島梁川「枕頭の記」『梁川全集五卷』春秋社、東京、一九二一年、三六七頁
- 37 同上「見神の意義及び方法」『梁川全集五卷』春秋社、東京、一九二一年、四九三頁
- 38 鶴岡賀雄「網島梁川の神秘主義とキリスト教」加藤信朗（監修）『キリスト教をめぐる近代日本の諸相』収録、オリエンツ宗教研究所、東京、二〇〇八年
- 39 マーク・R・マリンス（著）高崎恵（訳）『メイド・インジャパンのキリスト教』、トランスビュー、東京、二〇〇五年、一一一頁
- 40 川合信水（著）、安井英二（編集）「山月川合信水先生御教話覚書」、『学道叢書〈四〉』、基督心宗教団事務局出版部、一九六九年、一九八頁
- 41 マーク・R・マリンス（著）高崎恵（訳）『メイド・インジャパンのキリスト教』、トランスビュー、東京、二〇〇五年、一一九頁
- 42 矢内原忠雄『余の尊敬する人物』『矢内原忠雄全集第二四卷』岩波書店、東京、一九六三年、一三四頁

（東北大学大学院）